

活動報告書

報告者氏名: 亀田隼人 長峯美紀 安永啓司 所属: 東京学芸大学附属特別支援学校 記録日: 平成 27 年 2 月 21 日

【対象児の情報】

・学年

- ①知的障害特別支援学校（以下、本校）幼稚部 5 歳児学年女児（以下、A 児）
- ②A 児が毎週水曜日に通う居住地域の保育園（以下、B 保育園）の在園児 14 名

・障害名

- ①知的障害
- ②なし

・障害と困難の内容

- ①2013 年度入学当初から、タブレット端末を幼児に 1 台ずつ用意して写真や動画で撮り貯めた日常の学校生活の様子をそのタブレット端末に入れ毎週末に各家庭に持ち帰って家族で見てもらい、所謂連絡帳の補完的利用（連楽帳）の取り組みを行ってきた。その結果、取り組み開始間もなく保護者が週末の幼児の家庭での様子を写真や動画で撮影し学校に持ち寄るようになった。そこで、各家庭から集まったそれらの画像を一人ひとりが学級の友達の前で紹介する授業「思い出遊び」を行った。A 児には音声言語による明確な表出はなかったが、授業の中では、画像を用いて自ら友達に過去の経験を伝えたり（自己意識）友達の経験に関心を示したり（共感性）することができるようになった。

年間を通して毎週水曜日に行う B 保育園との交流場面においては、音声言語が主なコミュニケーション手段であるため、自ら伝えたいことを伝えられず、相手に表情やサインで応えることによって意思を表出する「受動的」な関わりがほとんどであった。

- ②縦割り編成のグループとして A 児と 1 年間同じ部屋で過ごした園児が多かった。園児の中には、同じ部屋で A 児の存在に気づいていたが、A 児について知っていることは、氏名や所属校名、あるいは交流で毎回行う朝の体操等共に経験した遊びの様子などに限られた。

【活動目的】

・当初のねらい

インクルーシブ保育における合理的配慮としてのタブレット端末の役割の検証。

- ①A 児が「連楽帳」を B 保育園に持ち込み使用することで、A 児がもつ自己意識や共感性のスキルを発揮する。
- ②B 保育園園児たちが A 児の経験や好みのような「内面」に関心をもつ。

・実施期間

2014 年 7 月～2 月

・実施者

亀田隼人 長峯美紀 岡本有未

・実施者と対象児の関係

A 児の学級担任および講師

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

本校幼稚部は、生活経験を広げることと社会性を育むことをねらいにB保育園と30年以上にわたり「交流」を行ってきた。毎年5月に本校とB保育園の職員とが直接話し合いの場を設けて幼児の実態を確認し、活動計画を立てた。6月から2月の毎週水曜日は、本校幼児はB保育園に直接登降園して活動した。それに加え、日常的な散歩やいも掘りなどの行事の際にはB保育園の園児が本校に来校することもあった。

①本校における「思い出遊び」の授業では、「連楽帳」に撮り貯めた画像の中から自分の紹介したい経験を選び、見せる姿が観察された。教員や友達が「いいね」「すごい」などと褒めると自慢気な表情をみせることが多かった。また、友達が紹介した経験に関心をもって眺める様子もあった。たまたま同じ場所に行った経験があったときには、自分と友達の画像を順に指差し教員や友達の顔を見ることでそのことを伝える姿も観察された。



図1 A児の遊びの様子

交流の場では、園児に聞かれたことがわかれば頷きや表情で応じた。園児からのスキンシップには笑顔になった。また、毎回行う朝の体操では、周りの人の動きを見て同じように動くことを楽しんでた。しかし、自ら園児に関わろうとする姿はほとんどなく、受動的な関わり

が主であった(図1)。「思い出遊び」の授業以降、自由遊び場面でも、自ら友達の肩を叩いて呼んだり、友達の顔を覗き込んだりするようなA児から友達に関わる様子がみられるようになった。

②2013年7月初めにB保育園園児14名(音声言語で答えられる年長、年中児中心)を対象にA児の印象に関するインタビューを行った(表1)。その結果、「知らない」という返答が最も多く、知っていたとしても「Aちゃん(名前)」「学大(所属校)の子」「ダンスした」「お話ができない」など外見から判断できることやその場で共有した事象に関することに限られた。

表1 インタビュー「Aさんってどんな子？」(7月初旬実施)

※()内は人数

外見&共通体験	内面
・知らない(8) ・ダンスした(1) ・ままごとした(1) ・くわ(がたの部屋)の子(1) ・お話ができない(1) ・学大(1)	・優しい人(1)

・活動の具体的内容

【「思い出帳」導入前】

- 「連楽帳」の実践は毎週末、「思い出遊び」の実践は原則隔週初に引き続き行った。
- 本校で使用している「連楽帳(iPadmini)」を「思い出帳」(図2)と命名した。
- A児の保護者に、B保育園での「思い出帳」使用の了解を得た。
- B保育園には、園の職員と話し合い、理解をしていただいたうえで園長の使用許可を得た。話し合いでは、A児にとっての「思い出帳」の必要性、「魔法のプロジェクト」の趣旨、概要について説明した。職員からは

園児の個人情報の管理や保護者への理解の得方、タブレット端末を園で使用するこゝによる園児たちへの影響などが話題としてあげられた。

☞保護者に対しては、活動の趣旨と個人情報の管理方法をA4大の資料にして園内の掲示板に貼付した。質問や意見には、必要に応じて実施者が個別に対応することとした。

☞「思い出帳」は、以下の条件で使用するこゝになった。

〈使用条件〉

- A児は自由遊び場面に10分程度「思い出帳」を携帯する。
- 園児との会話、集まる人数を写真やビデオ等で記録する。
- 必要に応じて保育士と共に活動を振り返り、改善する。



図2 「思い出帳」

【「思い出帳」導入後】

●「思い出帳」は、実施期間中に12回持ち込んだ。

●実施期間中の対象児の変容に応じて、「思い出帳」の設定を変更した。

☞画像（「思い出」）の中から本校での遊びの様子をよく選んでみせるようになったこゝから、A児がより意図的に「思い出」を選択することができるように、写真アプリ内に「がっこう」「A児（名前）」のアルバムを分けて設定した。

☞A児は「思い出帳」の様々な操作を楽しむようになり、誤操作で「思い出」が消えてしまうこゝがあったため、iOS8へアップデートした。「最近削除された項目」の活用で、「思い出」が消えるこゝがなくなった。

・対象児の事後の変化

※図3に「思い出帳」使用の様子を示した。

①「思い出帳」がある場面で、

☞園児の「いいね」のコメントに笑顔等で反応した。また、園児の要求に応じて「思い出」の映るモニターを園児に向けた。

「思い出帳」がない場面で、

☞自分の給食をフォークに刺して園児にあげようとした。

☞餅つきをする園児を応援しようと、口に手を添えて大声を出した。

☞自ら園児の肩を叩いて注意を引いたり、園児の顔の前に自分の顔を出してお辞儀（挨拶）をしたりした。



図3 「思い出帳」使用の様子

②導入当初はたくさんの園児がA児の周りに集まったが、後半では集まる人数は毎回違った。全く集まらないときもあった。

「思い出帳」がある場面で、

☞「○○みせて」と言葉や指差しで要求したり、「すごい」「僕も行ったこゝある」とA児の「思い出」に関心を示したりした。

「思い出帳」がない場面で、

☞「（席を）お隣しよう」とA児を誘った。

☞A児が欠席のときに実施者に対して「今日Aちゃんくる？と聞いた。

☞自由遊び場面でA児の手を引いて遊びに誘ったりする姿がみられるようになった。

☞音声ではなく、お絞りを見せて給食の開始を伝えた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

○タブレット端末は、明確な音声言語のない幼児が、自身が生活する社会において周囲の人との人間関係を深めるのに有効であった。インクルーシブ保育の実現には、本人のスキルアップだけではなく本人に対する周囲の理解が必要だと考える。

- ① タブレット端末を持ち込むことにより、交流場面でも自らの経験を自慢することができるようになった。本校以外に自己肯定感を高められる場ができたのだと考える。また、園児との間で自己肯定感を高めたからこそ、「思い出帳」がない場面でも積極的に園児に関わるようになったのだと考える。
- ② 「思い出帳」があったからこそ、園児はA児の「内面」への関心を高めたのだと考える。そして、園児はA児への関心が高まったからこそ、A児に対して伝えたい思いが膨らみ、A児に伝える方法を自ら工夫する姿があらわれたのだと考える。
- ③ A児、園児の変容が、B保育園の保育士のタブレット端末に対する意識を変えたのだと考える（下記のエピソード参照）。

・エビデンス(具体的数値など)

※「思い出帳」の導入後半（12月下旬）に、園児14名（音声言語で答えられる年長、年中児中心）を対象にA児の印象に関するインタビューを行った（表2）。

表2 インタビュー「Aさんってどんな子？」（12月下旬実施）

※（）内は人数

外見&共通体験	内面
・しらない（1） ・わらうのがかわいい（1） ・お話しできない（1） ・くわ（がたの部屋）の子（1）	・アンパンマンが好き（5） ・水族館（4） ・病院で電車乗ってた（2） ・妹いる（2） ・風船好き（1）

- 7月の実施結果に比べて12月下旬実施結果では「内面」に関する返答が増えた。また、質問に対して複数の返答をする園児も多かった。「内面」の返答内容はA児が「思い出帳」を用いて好んで園児と会話をしていた話題のうち園児の印象に強く残ったものだと考える。
- B保育園において、園児同士ではこのような話題は通常音声言語によってなされるが、A児との会話の場合は「思い出帳」があったからこそ、園児はA児の経験や興味を知ることができ、それに共感することができたのだと考える。園児の「いいね」等の共感にA児も笑顔で反応していた。
- 「思い出帳」を使った会話で、例えば音声難しいなら指差しなどのように、A児に伝える工夫をした経験は、「思い出帳」を使わないやり取りにも般化されたのだと考える。

・その他エピソード(画像などを含めて)

- B保育園園児たちは、ゲーム機ではないタブレット端末に接する機会が少なかった。実践開始当初は「これ、ゲーム？」などの質問もあった。その都度質問に答えることにより、A児に断りなしに「思い出帳」に触れることがなくなった。このことから、意味や使い方を丁寧に伝えれば、幼児期の子どもでも、子ども同士でタブレット端末をゲーム機としての役割以外で活用できることがわかった。

● 実践後に B 保育園保育士に結果を報告し感想を聞いた（表 3）。

⇒ 「思い出帳」導入前に聞かれた、他児への影響などのタブレット端末への不安は、使い方によっては友達同士の関係づくりに有効であり、幼児のニーズに応じて活用していくべきだという意識が変わった。そのことを踏まえ、今後の B 保育園との交流では、必要に応じたタブレット端末活用を考えていくべきだという共通確認を得ることができた。

表 3 B 保育園保育士の声

- ・ iPad が子育てにどのように入るのか不安だったが、物は使しよう。（人間）関係づくりに有効なことがわかった。
- ・ 小学校教育にもタブレット（端末）が導入される。当初はちょっとした恐れもあったが今後は前向きに考えたい。
- ・ この 1 年間で（A さんの）表情に自信が出てきた。笑顔が増えて周り（の園児）に雰囲気伝わる。それがまたいい結果になった。（だから）園児も気持ちをストレートに伝えられた。同じ地域の子として今後も関係を深めていきたい。
- ・ ○○ちゃん（本校の子）にも（タブレット端末は）いいかもね。うちの子（園児）にもね。